

Title	正岡子規の岐蘇雑誌二十首 : 電子計算機による漢詩技法の検出
Author(s)	和田, 克司
Citation	語文. 1984, 43, p. 41-59
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68719
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

正岡子規の岐蘇雜詩三十首

——電子計算機による漢詩技法の検出——

和田克司

本稿は二つの主題を持つ。一つは電子計算機による漢詩技法の検出、平仄記号の表示と、一つは正岡子規の岐蘇雜詩三十首の漢詩技法の問題と、その推蔽上の問題とである。

国文学の研究に電子計算機を用いることは、データ処理をどのように行なうかによって、きわめて有効な手段として、今後さらに一般化しうるのである。昭和五十七年から昭和五十八年にかけて、パーソナルコンピュータは、急速に機器類を、八ビットから十六ビットへと拡大化し、従前の六十四キロバイトから、百二十八キロバイトへと容量を増し、漢字 ROM が確立し、JIS 第一水準で二千九百六十五字の漢字が自由に使用できるようになり、すでに JIS 第二水準の漢字 ROM も整備され始めている。

また、フロッピー・ディスクett 両面倍密度で一メガバイトの容量を持ち、さらにハード・ディスクを内蔵したもので七メガバイト、その上、CPU をリレーショナル・データベースマシンとして構築すると、パーソナルコンピュータのレベルで、最大八十メガバイトに及ぶ容量を持ちうる段階となり、国文学の分野においても

実用可能となってきた。^{注1}

本稿では、プログラムの概略と JIS 第一水準で可能な範囲の漢詩と、その平仄記号とを一覧にする。プログラムは二種に分かれており、第一に漢字データ、第二に漢詩を表示し、その平仄記号を印字するものである。第一の漢字データはドライブ A に装填し、第二の漢詩データはドライブ B に装填する。ともに BASIC 言語で記述した。パーソナルコンピュータの操作上の問題と、容量と、速度と、ソフト面でのバックアップの問題とにより、ハードウェアは沖電気の #800 model 50 (16 ビット) を使用した。アイエフ八〇〇は、MS-DOS 上で動き、MS-DOS 上で外字を作成することができる。ワードプロセッサ的な機能を持っているために、PC 9801 (NEC) では、十二分に操作し得なかつた漢字が、完全に作動する。

ドライブ A の漢字データには、それぞれ便宜上、一項目六十四バイトを設定し、1 項目番号、2 シフト JIS コード、3 漢字、4 韻、5 現代中国語音、6 その他に区分した。^{注2} 漢字は、一漢字に一つの韻とは言えず、四以上の韻のある漢字もあるが、容量の関係から三種の韻を収納可能な限度とし、四種以上の時は記号で、その存在のみ

を見うるように試みた。その例、

項目	シフト	JIS	コード	漢字	中国音	中国音	韻第一	韻第二
2798-	9788-	4D68-	来-	lai-2	lai-4	上平声10-	卅声11	

右のように、平水韻を二種持つ漢字には二種、それぞれ現代中国語音と対応するように構成し、漢字の検索を項目番号(JISコード順連続番号に外字コードを接続)、シフトJISコード、JISコードのいずれからでも可能なように試みた。また、漢字データーのプログラムには、韻字百六韻の区分一覽、現代中国語音アルファベット順一覽などを用意してあるが、ここには触れない。

ドライブBの漢詩データーには、一データーに、百二十八バイトを設定し、七言律詩が収納可能なようにし、項目番号の二バイトを除けば、十四バイトしか余裕がなく、漢詩の作者名または、表題など、ごく必要なものに限って注記するための項目を、その十四バイトに宛てた。

平水韻を確認してゆくために、まづドライブBから、漢詩をとりだし、その漢詩一字一字の漢字のJIS区点コードを識別させ、そのJIS区点コードを計算させて、ドライブAの漢字データーの項目番号を呼び出す方法をとった。ついでドライブAの漢字データーの韻字データーを読みとらせ、七言律詩の時には、第一聯より第八聯まで、七項目づつ八行にわたって印字した。その五十六項目の平水韻略号の配列にしたがって、平声の場合には○印を、仄声の場合には●印を印字させた。またJIS第一水準にない漢字で、外字作成をしていない漢字の場合、a、平声のみの漢字には○(平水韻号は平声一)、b、仄声のみの漢字には●(平水韻略号は上去入0)、c、

平声仄声両様ある漢字には○(平水韻略号は○字0)とした。したがって平仄記号中に出てくる○印は、平声、仄声いずれも持つ漢字が該当箇所存在するが、JIS第一水準には存在しない漢字であることを示す。

以上が左に例示する1…平水韻略号と2…平仄記号の概略である。作表上煩雑になりすぎため、仄声の所屬漢字、例えば上声一董韻の董などを印字せず、平声の漢字のみを印字した。便宜上のことであつて、プログラム上困難な問題ではない。

さて3…平水韻略号第二について、前述した「来」に見るように、「来」は上平声十灰韻と、去声十一隊韻を持つ。「来」が去声である時には、通例の「来る」の意ではなく、「ねぎらう、ねぎらつてはげます」意である。つまり一般性をもつ韻字を第一とし、限定された用法の韻字を第二として扱った。3…平水韻略号第二と4…平仄記号第二とは、それぞれ、1…平水韻略号、2…平仄記号と同様であるが、漢字の韻が単一の場合には「=」で記し、前述の平声のみの漢字○と、仄声のみの漢字●は、たとえ二種以上の韻を持つ場合でも、重複して記さなかつた。しかし平声仄声両様ある漢字については、3…平水韻略号第二、4…平仄記号第二に重複させて記した。ここに例として杜甫の「登高」を見る。律詩の範たる様子をここに見ることが出来る。韻は上平声十灰韻、第一、二以下偶数聯に押韻し、二四不同、二六対で、粘法も整い、前聯後聯の対句もまた美しい。第一聯第二字急、同第六字嘯、第八聯第二字倒が、それぞれ孤仄となっている。平仄記号第二より見て、「風」の去声一送韻「潦」の上声十九皓韻と入れ換えると、孤仄が消えるように見えるが、それぞれ意義を異にするので、^注ここでは入れ換えは不能である。

○ ○ ● ● ● ● ○ ○

下 入 去 入 上 上 上
平 声 声 声 平 平 平
1 1 1 1 6 6 1
4 5 4 5 7 6 1
豪 刪 虞 東

● ○ ○ ● ● ○ ○ ●

上 下 上 上 下 下 入
平 平 声 声 平 平 声
1 1 1 1 1 8 1
9 4 先 先 庚

○ ● ○ ○ ○ ● ○ ○

上 上 下 下 入 下 下
平 平 平 平 声 平 平
1 7 5 4 1 6 1
1 真 歌 支 陽 麻 先

○ ● ● ○ ○ ● ● ○ ○

下 去 去 下 上 入 入 下
平 声 声 平 平 声 声 平
1 2 1 1 1 1 4
9 4 尤 江 支 豪

● ○ ● ○ ● ○ ● ○ ○

入 上 入 下 上 下 上 上
声 平 声 平 声 平 声 平
1 1 1 7 1 1 1
3 元 陽 蕭 蕭 元

● ○ ○ ● ● ○ ○ ●

上 下 下 入 上 下 上 去
声 平 平 声 声 平 平 声
2 1 1 1 1 2 1 8
5 7 陽 蒸 蕭 微

2...平

1...平

○ ● ○ ● ○ ● ○ ○ 仄記号

上 上 入 上 上 上 水
平 平 声 平 平 平 韻
1 1 1 1 1 1 0 略
0 2 1 1 1 1 0 灰 号

風急天高猿嘯哀
渚清沙白鳥飛迴
無辺落木蕭蕭下
不盡長江滾滾來
万里悲秋常作客
百年多病独登台
艱難苦恨繁霜鬢
潦倒新停濁酒杯

杜甫

l j b w b w z f
 a i a n a u u e n
 o a i a n 4 2 u 3 e n
 — n 3 4 2 u 3 g
 2 1 1 1

● || || ● || ●

上 = = = 入 = = 去
 声 1 声 6 1

d n n l j b j
 a n i i i i q j
 — a n a 3 i i a n g i i
 3 2 4 1 1 2
 1 1

● ● || || || || ||

去 去 = = = = =
 声 声 1 = = = = =
 2 1 5
 0 5

x k d b c h s t
 i n u o e i a l u a i a n
 1 3 1 1 1 4 1 1
 1 1 1 1 2 1 1

|| || || ● || || ||

= = = = 上 = = = =
 声 2
 2

t h b q j m g
 i n e i i i u a a o
 2 4 4 1 1 2 1
 2 4 4 1 2 1

|| || || || || || ||

= = = = = = = = =

z f d c k x n y
 h a u c h u n i a u a n
 o o — a n g u n i a o a n
 2 2 2 3 1 3 2
 2 2 2 3 1 3 2

|| ○ || || || || ||

= 上 = = = = =
 平 1
 . 寒 4

j s d z k x f x
 i u h e u n i a i a o
 3 u n a n g 4 u n 3 i a o 4
 3 a n g 1 4 3 1 4
 1 1 1 1 4 5
 1 1 1 1 4 5

|| ● || ● || || || ●

= 去 = 去 = = = 入
 声 2 声 2 = = = 声
 3 1 4
 3

b b t k l x h a i
 e i a i e i a i u a i
 1 4 — 4 — 4 2 a i
 1 4 2 2 1 2

|| || ○ || ● ● || ||

= = 上 = 去 去 = = 水
 平 4 声 1 声 2 = = 韻
 . . 支 . 1 2 . . 略

5: 現
 代 中 國 語 音

4: 平
 仄 記 号 第 二

3: 平
 水 韻 号 第 二

● || || || || || || ||

l o o o o o o o
a o o o o o o o
o
—
3

○ ○ ● ● ● ● ○ ● ○ ○

● || || || ● || || ||

d o o o j o o o
a o o o i o o o
o
—
4 3

● ○ ○ ● ● ○ ○ ○ ○
急

|| || || || ● || || ||

o o o o z o o o
o o o o h o o o
a
n
g
—
3

○ ● ○ ○ ○ ○ ● ○ ○ ○

|| || || || || || || ||

o o o o o o o o
o o o o o o o o

○ ● ● ○ ○ ● ○ ○ ○
白

|| ○ || || || || || ||

o p o o o o o o
o o o o o o o o
—
2

○ ○ ○ ○ ● ● ● ○ ○ ○
濁 独

|| || || || || || || ||

o o o o o o o o
o o o o o o o o

● ○ ○ ● ● ○ ○ ●

|| || ○ || ● || || ||

8
∴
平
仄
記
号
第
四

o o y i o l a o o o
o o i o a i o o o
—
2 4

7
∴
現
代
中
國
語
音
第
二

○ ● ○ ● ● ● ○ ○ ○ ○

6
∴
平
仄
記
号
第
三

仄起の形で第二聯の第五字の仄、第三聯の第五字平、第五聯の第五字平、第六聯の第五字仄、第七聯の第五字平、すべて平仄の法にかなった構成となっている。参考に付した現代中国音による平仄の識別は、急白独濁の入声音を仄記号に変換すれば可能なことを示している。

二

子規の岐蘇雜詩三十首は、明治二十四年六月二十五日から七月四日の十日間の木曾旅行をもとに創作した漢詩であつて、紀行文「かけはしの記」と対をなすものである。岐蘇雜詩三十首についての最初の論文は渡部勝巳先生のものである。^{注4} 同論文では岐蘇雜詩三十首の初案（諸先生刪正詩稿）所収、「子規全集」第九巻を紹介し、定稿に至る諸問題が論じられた。しかしその後、「子規全集」（講談社版）第八巻解題で、^{注5}

この三十首の構成を見ると、其一は韻書（平水韻）で示す上平一東で押韻してあり、其二は二冬の韻、其三は三江の韻、（中略）其十六から下平に移り、其十六は一先の韻で、其二は二蕭の韻で押韻し、以下其三十を十五咸の韻で押韻するまで、下平十五韻の全部をその順序とおりの韻を踏んで制作してある。つまり三十首は、上平十五韻下平十五韻、平声三十韻で韻書の示すとおりの順序に押韻して構成した連作である。

と、新しい視点で岐蘇雜詩三十首の趣向の妙味を見出されたのである。その先蹤について「随録詩集」第二編、「富士の寄せ書」所収の「祭雪別草」（「子規全集」第二十巻二四一頁）が掲げられており、子規は予てこの三十首に就いて、上平十五韻下平十五韻を並べ、平声三十韻の七律三十首を作る夢を抱き続けていて、旅に出

る前から富士に対して木曾を主題にその三十首を試みる意図を抱いていたに違いない。年月をかけて練り上げた苦心会心の自作である。

と述べられた。新しい発見であつた。

岐蘇雜詩三十首は、明治二十五年八月十三日、新聞「日本」に「類祭書屋俳話」とともに、三十首中の其一、其四、其五が発表され、翌八月十四日に三十首中の其六、其七、其十が、八月十六日に三十首中の其十五、其十六、其十七が、八月十七日に三十首中の其二十一、其二十五、其二十六が、八月十八日に三十首中の其二十七、其二十八、其二十九が、ひきつづき発表された。この時、すでに五月二十七日より六月四日まで六回にわたって「かけはしの記」が発表されていることを考えると、子規の意欲的で、多彩な登場を見ることができると。

子規の木曾旅行の計画は、三十韻三十首の構想ができあがった段階で、すでに胸中にあつたと見るべきであろう。それは「諸先生刪正詩稿」の、岐蘇雜詩三十首の序で

蓋木曾之山三十余里、千匝万疊、塵氣不到、安知非造物者別造一乾坤、而俟天下之厭世家乎

と述べたように「木曾の三十里」が結びついていたのである。三十里三十韻三十首の場所として木曾があり、そこに子規の洒落があつた。この着想は、房総旅行直後に得たようである。親友大谷は空に宛てた書簡で

小生も先日中少々頭部を攻撃せられたるにより早速房州旅行と出掛候が今度ハ大磯行杯の比に非ず皆笠を戴き蓑ヲかぶり、一足のわらんじも二日はくなど、その勇氣打扮、君等富家の子弟

ニハ葉ニ見せたまき位ニ御座候 此夏も亦同じ姿で木曾道中と出かける積り故君若し大阪に給ハ、其時こそ我黒仏的の尊顔を拜ませ申べし。

明治二十四年四月七日に書き送っていることから推察しうるのである。房総旅行と木曾旅行の計画とが連続していることから見て、漱石の「木屑録」との関連性は否定できない。^{注6}

ただ、「かけはしの記」の草稿が残らず、岐蘇雑詩三十首の初稿が、明治二十五年三月二十四日内藤鳴雪の批評をうけ、四月二十一日竹村鍛の批評をうけているので、三十里三十韻三十首の創作は、木曾旅行後は半年を経た時と、はばをもつて考えねばならない。

この時期の「漢詩稿」は、同時期の「寒山落木」が草稿的であったのに対し、ほぼ定稿としての性格を持つている。^{注6} 前述の「日本」発表後「漢詩稿」に記された岐蘇雑詩三十首は、その後も部分的に修正が入り、三十首中の其五は、明治二十八年秋、森円月の依頼により揮毫された時には、「老樹」を「緑樹」に、「暑氣」を「日影」に、「金鼎猶余」を「爐氣猶留」に訂正している。これらの定稿後の改変は、本稿別表の「改」として、定稿との平仄の相違を一覧化した。また、初稿から定稿への推敲について、「しやくられの記」などに見える、明治二十三年の三井寺僑居の漢詩と比較すると、三十韻の韻字のみに限定しても、抜本的な改作となっており、その対比は前記渡部論文に詳しく述べられている。

三

左に岐蘇雑詩三十首の定稿と、平水韻略号・平仄記号を一覧にする。印字にあたって JIS 第一水準にない三十首中の漢字は、判読の

便宜上「○●○●」を避け、それぞれ該当の漢字を挿入したが、平水韻略号の欄は「平声一」「上去入0」「◎字」と印字されている。その場合でも、平仄記号は、JIS 第一水準に入らぬ漢字の平仄を正しく配列している。

JIS 第一水準にない漢字で、押韻の漢字として重要なものは、外字処理によって一字づつ作成し、前述の A ドライブ 中の漢字データに登録してあるので、JIS 第一水準の漢字と同様に処理してある。その後に掲げた表の意味は、次のようである。

第一欄、三十首中の其より其三十まで、アラビア数字で示す。

「諸先生刪正詩稿」中の三十首を「初」、「漢詩稿」中の三十首を「定」、「漢詩稿」中に加筆されたものを「改」と略号で示す。

第二欄、四声と押韻。

第三欄、平起と仄起の区分。

第四欄、二四不同の確認。二四の間に拗体のある時は、その該当漢字を示す。

第五欄、二六対の確認。二六の間に拗体のある時は、その該当漢字を示す。

第六欄、粘法。二四六ともに粘法の時は「粘」、四または六が粘法の時は「四粘」「六粘」。拗体の時には「不粘」で示す。

第七欄、孤平の確認。該当の漢字を示す時に、各聯を漢数字で、何字目かをアラビア数字で示す。空欄は孤平が存在せぬ事を示す。

第八欄、孤仄の確認。他は第七欄に同じ。

第九欄、平三連、仄三連の確認。空欄は三連の存在せぬ事を示す。また○印と日付とは新聞「日本」発表日付である。

第十欄、注記。番号は三十首中の注番号。

共一

●○○○○●○ 入平1 2 文 上平1 4 文 去平1 4 文 下平2 2 職

共二

●○○○○●○ 入平1 2 文 上平1 4 文 去平1 4 文 下平2 2 職

群峰如劍刺蒼空
古寺鐘衣層樹外
百年蒼壁危苔藓
欲問虎穿龍窟跡

●○○○○●○ 上平1 2 冬 去平1 4 冬 上平1 4 冬 下平1 3 職 先 佳

立馬千山第一峰
密林路雨道幽危
俯瞰寒村家簇簇
文餘若有論功日

●○○○○●○ 上平1 2 冬 去平1 4 冬 上平1 4 冬 下平1 3 職 先 佳

●○○○○●○ 入平1 2 文 上平1 4 文 去平1 4 文 下平2 2 職

踏人歧路形勝雄
鷓鴣啼斷翠雲中
萬里河山落日紅
驚灘駭馬独嘶風

●○○○○●○ 上平1 2 冬 去平1 4 冬 上平1 4 冬 下平1 3 職 先 佳

手擎犀斗豁心胸
深谷羸風有臥龍
回看飛瀑空垂壑
願向仙陽喚種封

●○○○○●○ 上平1 2 冬 去平1 4 冬 上平1 4 冬 下平1 3 職 先 佳

●○○○○●○ 入平1 2 文 上平1 4 文 去平1 4 文 下平2 2 職

2 平 水 韻 略 号

●○○○○●○ 上平1 2 冬 去平1 4 冬 上平1 4 冬 下平1 3 職 先 佳

●○○○○●○ 上平1 2 冬 去平1 4 冬 上平1 4 冬 下平1 3 職 先 佳

共三

●○○○○●○ 上平1 2 冬 去平1 4 冬 上平1 4 冬 下平1 3 職 先 佳

共四

●○○○○●○ 上平1 2 冬 去平1 4 冬 上平1 4 冬 下平1 3 職 先 佳

地集細流觸大江
層巒路險人工鑿
崖下水聲搖客杖
旅亭寂寞燈花落

●○○○○●○ 上平1 2 冬 去平1 4 冬 上平1 4 冬 下平1 3 職 先 佳

一入蘇梁物尺奇
雨穿絕壁松根怒
杉輪巖壁名僧說
荊波滄海日誰託

●○○○○●○ 上平1 2 冬 去平1 4 冬 上平1 4 冬 下平1 3 職 先 佳

●○○○○●○ 上平1 2 冬 去平1 4 冬 上平1 4 冬 下平1 3 職 先 佳

天成奇景世無雙
峭壁石紋神力扛
屋頭山色竊煙態
半夜橋前圓伏泡

●○○○○●○ 上平1 2 冬 去平1 4 冬 上平1 4 冬 下平1 3 職 先 佳

煙霞又發壯生痴
水動峰巒仗屐危
蘿苔蒼壁頭天尺
華峯豈願頭陀子

●○○○○●○ 上平1 2 冬 去平1 4 冬 上平1 4 冬 下平1 3 職 先 佳

●○○○○●○ 上平1 2 冬 去平1 4 冬 上平1 4 冬 下平1 3 職 先 佳

共廿一

上平 上声 下平 下声 入声
先 尤 尤 尤 尤 尤 尤 尤 尤 尤

〇〇〇〇〇〇〇

共廿二

上平 上声 下平 下声 入声
先 尤 尤 尤 尤 尤 尤 尤 尤 尤

〇〇〇〇〇〇〇

城垣月暗狼烟起
自古无人能跋涉
山窮猶仗浮塵到

上平 上声 下平 下声 入声
先 尤 尤 尤 尤 尤 尤 尤 尤 尤

〇〇〇〇〇〇〇

天集前嶺個裝威
今來石在山何許
匪底有村家駭石
鐘鼎一踏向龍尾

上平 上声 下平 下声 入声
先 尤 尤 尤 尤 尤 尤 尤 尤 尤

〇〇〇〇〇〇〇

嶺巖一水在甬腔
巖樹森迷索噴蛇
由來此地清談繁

上平 上声 下平 下声 入声
先 尤 尤 尤 尤 尤 尤 尤 尤 尤

〇〇〇〇〇〇〇

岐蘇豈是掃風光
峽出羣層雲亦忙
朝出羣層雲亦忙
峽出羣層雲亦忙

上平 上声 下平 下声 入声
先 尤 尤 尤 尤 尤 尤 尤 尤 尤

〇〇〇〇〇〇〇

水韻略
水韻略
水韻略
水韻略

上平 上声 下平 下声 入声
先 尤 尤 尤 尤 尤 尤 尤 尤 尤

〇〇〇〇〇〇〇

共二十四

上平 上声 下平 下声 入声
先 尤 尤 尤 尤 尤 尤 尤 尤 尤

〇〇〇〇〇〇〇

王化瀾聞鼓腹
山中已布新村制
稚子挾書上庠學
隣家相訪無他語

上平 上声 下平 下声 入声
先 尤 尤 尤 尤 尤 尤 尤 尤 尤

〇〇〇〇〇〇〇

南下蘇江水不停
靈樺村市器風白
百雉重城委宛幽
板橋認得徵音寺

上平 上声 下平 下声 入声
先 尤 尤 尤 尤 尤 尤 尤 尤 尤

〇〇〇〇〇〇〇

天時地氣終均平
土俗猶存白駭名
老翁穿袴踏新
先賢留頭套鵝成

上平 上声 下平 下声 入声
先 尤 尤 尤 尤 尤 尤 尤 尤 尤

〇〇〇〇〇〇〇

孤節昂昂日冥冥
山剽天公驟雨青
千年斷碣對郵亭
石壁老杉繞一局

上平 上声 下平 下声 入声
先 尤 尤 尤 尤 尤 尤 尤 尤 尤

〇〇〇〇〇〇〇

水韻略
水韻略
水韻略
水韻略

上平 上声 下平 下声 入声
先 尤 尤 尤 尤 尤 尤 尤 尤 尤

〇〇〇〇〇〇〇

共廿一

上平 上声 下平 下声 入声
先 尤 尤 尤 尤 尤 尤 尤 尤 尤

〇〇〇〇〇〇〇

共二十五

奇寒傲骨歸便後
天近石岩混如雨
入雲鳥道往疑遠
薄暮鐘聲穿樹

上平 4
下平 4
入平 4
上平 4
下平 4
入平 4
上平 4
下平 4
入平 4
上平 4
下平 4
入平 4

○●●●●○●○

上平 4
下平 4
入平 4
上平 4
下平 4
入平 4
上平 4
下平 4
入平 4

○●●●●○●○

上平 4
下平 4
入平 4
上平 4
下平 4
入平 4
上平 4
下平 4
入平 4

○●●●●○●○

上平 4
下平 4
入平 4
上平 4
下平 4
入平 4
上平 4
下平 4
入平 4

○●●●●○●○

上平 4
下平 4
入平 4
上平 4
下平 4
入平 4
上平 4
下平 4
入平 4

○●●●●○●○

上平 4
下平 4
入平 4
上平 4
下平 4
入平 4
上平 4
下平 4
入平 4

○●●●●○●○

上平 4
下平 4
入平 4
上平 4
下平 4
入平 4
上平 4
下平 4
入平 4

○●●●●○●○

上平 4
下平 4
入平 4
上平 4
下平 4
入平 4
上平 4
下平 4
入平 4

○●●●●○●○

上平 4
下平 4
入平 4
上平 4
下平 4
入平 4
上平 4
下平 4
入平 4

○●●●●○●○

共二十六

万岳千峰欲任頭
天連三越東西垓
二頃桑田數家屋
深山別有舊園在

上平 4
下平 4
入平 4
上平 4
下平 4
入平 4
上平 4
下平 4
入平 4

○●●●●○●○

上平 4
下平 4
入平 4
上平 4
下平 4
入平 4
上平 4
下平 4
入平 4

○●●●●○●○

上平 4
下平 4
入平 4
上平 4
下平 4
入平 4
上平 4
下平 4
入平 4

○●●●●○●○

上平 4
下平 4
入平 4
上平 4
下平 4
入平 4
上平 4
下平 4
入平 4

○●●●●○●○

上平 4
下平 4
入平 4
上平 4
下平 4
入平 4
上平 4
下平 4
入平 4

○●●●●○●○

上平 4
下平 4
入平 4
上平 4
下平 4
入平 4
上平 4
下平 4
入平 4

○●●●●○●○

上平 4
下平 4
入平 4
上平 4
下平 4
入平 4
上平 4
下平 4
入平 4

○●●●●○●○

上平 4
下平 4
入平 4
上平 4
下平 4
入平 4
上平 4
下平 4
入平 4

○●●●●○●○

上平 4
下平 4
入平 4
上平 4
下平 4
入平 4
上平 4
下平 4
入平 4

○●●●●○●○

共二十七

盤空危棧度岑崆
古洞春秋靈竇長
廢城殘壁淚多少
一片斷碑香火冷

上平 4
下平 4
入平 4
上平 4
下平 4
入平 4
上平 4
下平 4
入平 4

○●●●●○●○

上平 4
下平 4
入平 4
上平 4
下平 4
入平 4
上平 4
下平 4
入平 4

○●●●●○●○

上平 4
下平 4
入平 4
上平 4
下平 4
入平 4
上平 4
下平 4
入平 4

○●●●●○●○

上平 4
下平 4
入平 4
上平 4
下平 4
入平 4
上平 4
下平 4
入平 4

○●●●●○●○

上平 4
下平 4
入平 4
上平 4
下平 4
入平 4
上平 4
下平 4
入平 4

共二十八

羊腸九曲鴉風驟
雲氣飛飛起東北
清猿破曉月三峽
危棧托身蘿葛在

上平 4
下平 4
入平 4
上平 4
下平 4
入平 4
上平 4
下平 4
入平 4

○●●●●○●○

上平 4
下平 4
入平 4
上平 4
下平 4
入平 4
上平 4
下平 4
入平 4

○●●●●○●○

上平 4
下平 4
入平 4
上平 4
下平 4
入平 4
上平 4
下平 4
入平 4

○●●●●○●○

上平 4
下平 4
入平 4
上平 4
下平 4
入平 4
上平 4
下平 4
入平 4

○●●●●○●○

上平 4
下平 4
入平 4
上平 4
下平 4
入平 4
上平 4
下平 4
入平 4

共二十九

行覺白雲鞋底深
黃浦日夜多龍吟
寒士書卷古今今
宣公關下雨淋淋

上平 4
下平 4
入平 4
上平 4
下平 4
入平 4
上平 4
下平 4
入平 4

○●●●●○●○

上平 4
下平 4
入平 4
上平 4
下平 4
入平 4
上平 4
下平 4
入平 4

○●●●●○●○

上平 4
下平 4
入平 4
上平 4
下平 4
入平 4
上平 4
下平 4
入平 4

○●●●●○●○

共三十

仙境峰巒費細探
水声龍說走西南
白鶴唳煙秋一潭
風流久入雅人談

上平 4
下平 4
入平 4
上平 4
下平 4
入平 4
上平 4
下平 4
入平 4

○●●●●○●○

上平 4
下平 4
入平 4
上平 4
下平 4
入平 4
上平 4
下平 4
入平 4

○●●●●○●○

上平 4
下平 4
入平 4
上平 4
下平 4
入平 4
上平 4
下平 4
入平 4

○●●●●○●○

共三十一

水鏡略号

上平 4
下平 4
入平 4
上平 4
下平 4
入平 4
上平 4
下平 4
入平 4

○●●●●○●○

上平 4
下平 4
入平 4
上平 4
下平 4
入平 4
上平 4
下平 4
入平 4

12改上平声12文韻仄起不同	12定上平声12文韻仄起不同	12初上平声12文韻平起不同	11定上平声11真韻平起不同	11初上平声11真韻仄起不同	10定上平声10灰韻仄起不同	10初上平声10灰韻仄起不同	9改上平声9佳韻仄起不同	9定上平声9佳韻仄起不同	9初上平声9佳韻仄起不同	8改上平声8齊韻平起不同	8定上平声8齊韻平起不同	8初上平声8齊韻平起不同	7定上平声7虞韻平起不同	7初上平声7虞韻平起不同					
巴	巴	催成	对	对	对	对	对	对	吾	南	南	南	濃	飛					
不粘四2雨	四粘三6頭	不粘四2雨	四粘三6頭	粘八2雲	粘二2氣	粘二2氣	粘七6然	粘	粘	不粘四粘三6孤	不粘四粘五6狐	不粘四粘五6狐	不粘四粘五6狐	四粘一2來	四粘				
一6氣	一6氣	六2女	二2棘	二6棘	八2味	五2棧				八6病	二3鳥	六6狗	二6色	六6狗	二6色	六6狗	三2六2	二2二6	六2溢
						8											8		14

也孤仄 五2限 五2限 五2限 注②去 聲15

19定下平声4豪韻仄起不同	19初下平声4豪韻仄起	18定下平声3肴韻仄起不同	18初下平声3肴韻仄起不同	17定下平声2蕭韻平起不同	17初下平声2蕭韻平起不同	16定下平声1先韻平起	16初下平声1先韻平起	15定上平声15刪韻仄起不同	15初上平声15刪韻平起不同	14改上平声14寒韻仄起不同	14定上平声14寒韻仄起不同	14初上平声14寒韻仄起不同	13定上平声13元韻仄起不同	13初上平声13元韻仄起不同					
对	虚	对	仙	对	对	对	对	对	又差成	花	花	对	对	对					
粘七2民	不粘	不粘	四粘二2臨	粘二2羅	粘	不粘三3三5	不粘八2	粘	四粘一2四2六6太	不粘	四粘七2憐	不粘	四粘	粘	四粘二2崖	粘五2重			
五2將	一2小	一2小	五2破	八6酒	五2隔				五2棧	一6路	一6路	一6路	四2似	一2氣	六2似				
					8			8	山又山								8		16

聲23 注④去 聲17 注③去 也孤仄 五2雨

26初	25改	25定	25初	24定	24初	23定	23初	22定	22初	21改	21定	21初	20定	20初
下平声11尤韻仄起不同	下平声10蒸韻平起不同	下平声10蒸韻平起不同	下平声10蒸韻平起不同	下平声9青韻仄起不同	下平声9青韻仄起不同	下平声8庚韻仄起不同	下平声8庚韻仄起不同	下平声7陽韻仄起不同	下平声7陽韻仄起不同	下平声6麻韻仄起不同	下平声6麻韻仄起不同	下平声6麻韻仄起不同	下平声5歌韻平起不同	下平声5歌韻平起不同
家不粘	四粘七2郷	不粘	四粘	不粘	四粘七2橋	不粘	四粘	对粘	对粘六2間	对粘六2中	对粘	对粘三6生	離不粘四粘四2余	離不粘四粘四2余
	二6万	六6欲	二6万	四2劃	一6処	五2挾	一6均	二2集	八2覚	一2集	一6有		六6已	六6已
	三2近	二6万	二6万	二2遼	四2劃	一6均	一6均	二2集	八2覚	一2集	一6有		六6已	六6已
			8・17										8・17	

八6齒
も孤仄

30改	30定	30初	29定	29初	28定	28初	27定	27初	26定
下平声15咸韻仄起不粘	下平声15咸韻仄起不粘	下平声15咸韻仄起不粘	下平声14塩韻平起入	下平声14塩韻平起入	下平声13覃韻平起不同	下平声13覃韻平起不同	下平声12侵韻平起不同	下平声12侵韻平起	下平声11尤韻仄起不同
冷不粘四六四粘三2看	冷不粘四六四粘三2看	冷不粘四六四粘三2看	材相不粘四2州	材相不粘五2翁	東不粘	東不粘	对粘	頭漁不粘	家不粘四粘
八2使	八2使	八2使	三2嶂	三2嶂	二2境	三2氣	六2土	六6古	六2土
			8・18	8・18			8・18		8・17
				も孤平					

* 注記欄の注①④は、平仄記号一覽中の次の箇所に付されるべきものである。

- 注①、其四の第五行第七字
- 注②、其九の第三行第四字
- 注③、其十八の第六行第四字
- 注④、其十九の第五行第二字

印刷のつごう上、表中に出し得なかつたことを御詫びする。
(編集担当者)

別表を通覧し、三十韻の押韻の技法はもちろんのこと、二四不同、二六対をはじめ、七言律詩のきびしい技法がよく整えられていることが明瞭である。それは「諸先生刪正詩稿」の初稿よりも、「漢詩稿」の定稿の方に一層確實に現れている。例えば、其一、其三、其四などのように、初稿で拗体であったが、定稿では、二四不同、二六対となっている。推敲に際し、平仄に意を用いたことはまちがいない。

また一見、初稿から定稿に推敲した際、せっかく整っていた平仄が崩れたように見えるものがある。其五の場合、第五聯に着目すると、初稿の「林属官家樵路細」は「○○○○○○●●」、定稿の「金鼎猶余鍊丹火」は「○○●○○○○●●」、改稿の「炉氣猶鍊丹火」は「○○○○●●●」となる。ともに「属」「鼎」「氣」が孤仄となり、その改善がなく、その上、「樵路細」を「鍊丹火」と改変したために、「丹」が平声であるので、二六対が消え、不粘で拗体となってしまうのである。しかし「丹」を仄声の他の漢字に置き換えるとするとこの箇所は仄三連となってしまう。すなわち、仄三連を避けて拗体としたと見るべきであろう。このように技法の種類によって、軽重のあったことは、其四、其十九において、孤平の孤仄より粘法を重視し、二六対とした例によっても知ることができる。

技法上、前聯と後聯との対比、韻字における第一韻字と第二韻字の問題、平水韻と現代中国語音との関連など触れるべき点は、なお多々ある。

四

七言律詩という律を重視する漢詩の世界にあって、平仄という、

いわば内部の骨格の観点から、子規の文学的世界に立ち入って見ると、そこには二重、三重、四重に絡まった高度の技法の存在に気付くのである。その困難な技法を乗り越えて、思い切った推敲を試み、明治二十五年三月二十一日に内藤鳴雪の批評をうけ、四月二十一日に、竹村鍛の批評をうけた後、比較的短時日に、国分青匡の手に届けられるまでに、並々ならぬ努力と創作への意欲があったことがわかる。

子規が漢詩の技法を重んじていたことは、明治二十九年「日本人」に発表した「文学」において明確である。^{注7}すなわち、

邦人の漢詩を作るに韻を踏み平仄を合はすこと形式的の技術たるを免れ邦人の支那音を解せざるがためなり。されば詩人が苦みて形式的に完全ならしめんとしたりとて其詩の音調に関する美は之を味ふ能はざるを以て終に韻を廢し、平仄を廢するの説など起るに至りたり。韻を廢し平仄を廢し而して漢詩の特色として残る所の者は何ぞ。(中略)平仄を廢する程ならば何故に韻を廢せざる。平仄と韻とを廢する程ならば何故に仮名交りには書かざる。

韻と平仄とを対比的に述べながら、その肝要なことを説いている。

この技法に満ち満ちた漢詩に対し、内藤鳴雪は其九に対して高い評価を与えながら

平淡中高至味は為壓卷^{注8}と評し、竹村鍛は其三をもっとも高く評価しながらも

雅兄於俳句則已入於平淡之域而詩則歌争奇於字句之間沾々自喜僕不解其故豈俳句尚平淡而詩以奇恠為高乎抑將雅兄已極俳句之奥妙而未得詩家之三昧也

批判的に子規の漢詩を捉えた。^{注8}かたや漢詩に対する、かたや俳句に対する平淡の評が子規に対し寄せられた。

子規の文字上の展開点において、この漢詩の技法は、三つの重要な問題を内包する。一つは、三十里三十韻三十首が醸成されてゆくまさにその時期に、子規の俳句開眼があったということ、^{注6}二つに、俳句開眼を機に「月の都」創作、幸田露伴との接触、「日本」への登場と一ヶ月きざみに進展していった、その最中に、岐岨雜詩三十首初稿が完成しているということ。三つに複雑な漢詩技法の対極点に俳句が存在し、その両極においてそれぞれ創作を推進してゆく、そこに子規の言う「詩人トナランコトヲ欲ス」(明治二十五年五月四日虚子宛書簡)ことの真意が存在するということ、以上の三項である。かくて新聞「日本」に「かけはしの記」(螺子)、「癩祭書屋俳話」(癩祭書屋主人)、「岐蘇雜詩三十首」(不如帰齋主人常規)三種の異なった文学形態の発表を試み、文学活動を開始するのである。

付記。漢詩の平仄検出プログラムは、沖電気のは 800 model SG に JIS 第二水準の漢字が装備された後に、JIS 第一水準の漢字データーと合成して公表するつもりである。電子計算機操作上の諸問題については、沖電気関西支社、同スペース・I 所長石橋康生氏はかスタッフの方々、同橋田一郎氏の懇切な助力を得た。

本稿は昭和五十七年度文部省科学研究助成費一般研究Cの研究成果の一部である。

注

注1、拙稿「子規短歌・長歌・旋頭歌各句索引」(大阪成蹊女子短期大学研究紀要「二十一号、昭和五十九年三月」)

注2、「新字源」(角川書店)をデーター作戦の基礎資料とした。現代中国語音については、『新華字典』『中日大辞典』『漢字詞典』を参照した。

注3、「風」去声一送韻は「ほのめかす、暗唱する」の意、「潦」は通例上声十九皓韻、大雨、にはたづみの意、下平声四豪韻は「潦倒」(落ちぶれた様子)と熟合した時に使う。

注4、渡部勝己「正岡子規「岐蘇雜詩三十首」の初案について」(愛媛大学紀要「人文科学」第十三巻)

注5、渡部勝己『子規全集』第八巻・漢詩新体詩、解題六九二頁。昭和五十一年七月。

注6、拙稿「正岡子規の俳句開眼への過程」(俳句文学館紀要「第一号、昭和五十七年九月」)

注7、『子規全集』第十四巻評論日記所収。明治二十九年十月五日発表。

注8、『子規全集』第九巻初期文集脚注による。(五七七頁、五七五頁)

注9、「城南評論」第二号(明治二十五年四月二十一日発行)『子規全集』第四巻俳論俳話一所収。中の「向井去来」において、子規は「去来は温厚篤実の君子にして道德上間然する所なきが故なるべし。是れ即ち芭蕉の彼を愛せし所以にして且つ彼が蒼老洗練なる俳句を造出して平談中に至味を寓せし所以なり。」と述べる。内藤鳴雪の評が深く内在していることは間違いない。